三村一族と備中兵乱

早島　潮

一、備中松山城

備中松山城は臥牛山の上に築城された山城である。鬱蒼とした自然林に覆われた臥牛山は北から大松山、天神の丸、小松山、前の山の四つの峰からなっている。山頂には何れも城址がある。最高峰は天神丸で標高四百八十メートルに及び、現存する山城としては、日本国内では最も高い所にあることで有名である。現存の城郭は小松山と前山とにあり、天神の丸と大松山にあるものは戦国時代以前の城址である。

城の歴史は鎌倉幕府の二代執権北条義時から承久の乱の戦功で備中有漢郷（現在の上房郡有漢町）の地頭職に任じられた秋庭三郎重信が仁治元年（一二四十）大松山に居館を築いたことに始まる。秋庭三郎重信は相模の国の三浦一族であった。大松山に居館が完成すると有漢の地から高梁の地へ移住し以後秋庭氏はここを本拠にした。

その後、後醍醐天皇が倒幕の兵を挙げたのをきっかけに（元弘の変・一三三一年）、南北朝並立の動乱の時代が始まるが、天皇が幕府方に捕らえられて隠岐に流された年の元弘二年（一三三二）に松山城には、備後の三好一族の高橋宗康が入城し、城域を小松山まで広げ城としての縄張りは徐々に拡大された。その後、高橋氏が約二十五年間在城したのち正平十年（一三五七）高師泰の子高越後守師秀が備中守護として松山城を預かることになった。彼は家臣の秋庭信盛を執事として起用した。しかし師秀は生来猜疑心が強く施政の判断にも間違いが多かったため、信盛からしばしば諫言を受けたが聞き入れず次第に主従不和となった。正平十七年（一三六二）に足利直冬ら諸国の南朝方が蜂起したとき、南朝方に帰順した山名時氏らの美作勢と備中の山名方の多治目備中守ら二千騎の軍勢を兵粮の蓄積された松山城へ引き入れたのが信盛であった。このため高越後守師秀はなす術もなく備前徳倉城へ逃げのびた。こうして再び秋庭重信の子孫の秋庭信盛が備中守護代として城主に帰り咲いたのである。

応仁の乱（一四六七）以後戦国時代に入り秋庭元重が城主の時、一五百九年に毛利氏に攻められて敗北し秋庭氏の名前は松山の城郭史から消えることとなった。

その後の戦国時代には将軍義稙の近侍上野民部大輔信孝の子である上野備前守頼久が鬼邑山城から入城し、以来上野氏、荘氏、三村氏と血に彩られた争奪戦が繰り広げられ、三村元親が最後の悲劇の城主として戦国時代に幕を閉じるのである。

現在の「備中松山城」は天和元年（一六八三）に松山藩主水谷勝宗の手によって完成したものといわれており、天然の巨石を天守台として利用した木造本瓦葺、二層二階建の天守は、内部に岩石落としの仕掛けや籠城に備えた石造りの囲炉裏・落城の時城主の家族が切腹するための部屋である装束の間・御社壇等手の込んだ造りがなされている。

二、洛中

「宗親よ、都の女性（にょしょう）にゃぁ、狐や狸のようなのが多いちゅうけん、誑かされんよう気ぃつけんせぇよ。都の女性は貢物だけ巻き上げてぇていつのまにかおらんようになるそうじゃけんのぉ」と久次が先輩面をして言った。

「そうだ。宗親は初（うぶ）で人がええけんのぉ」

と元資が同調した。

「わしゃぁ、女性（にょしょう）にゃぁ興味ねぇよ。それよりゃぁ折角都へ出てきたんじゃけん、良い刀でも捜して買うて戻りてぇと思よんじゃがなぁ」と宗親が生真面目な顔で応じた。

「刀なら粟田口へ行ってみんせぇ。腕のええ刀鍛冶がいる筈じゃけん。せぇにしても、街

並みは随分荒れとるのうぉ。火事跡だらけじゃが。昔、朱雀大路のあたりにはぎょうさん店が立ち並んで賑わようたのにのう」

と元資が昔、都へ上ったことがあり、街の様子を多少は知っているのをひけらかすような口調で言った。

周防国主・大内権助義興の京都における宿舎・大内館は、室町近くにあったが、その大内館の侍詰め所を根城として若武者達はそれぞれに羽を伸ばしていた。

明応の政変（一四九三年四月将軍義材を廃立しようと、日野富子と管領細川政元が企らんだ事件）で足利義材は河内で虜囚となり、同年六月越中に逃亡した。一四九八年九月足利義材は朝倉氏の援助で越中に於いて京都奪回の兵を挙げるが成功せず、周防国の太主大内権助義興を頼って八年近い歳月を周防で過ごしていた。時の管領細川政元は新将軍足利義澄を擁立して、権力を掌握するが、永正四年六月（一五百七）家僕の香西元長、薬師寺長忠らによって入浴中暗殺された。この事件を奇貨として、再度威権を振るうべく、足利義稙（当初義材、改名し義尹、ついで義稙）は大内義興の援助を受けて山陽道及び西海道の国主へ檄を飛ばし入洛を企てた。これに応じて諸国の武将が永正五年（一五百八）六月に上洛したとき、義興麾下の備中の豪族達も、侍大将として義稙に具奉したが、その中に三村備中守宗親、荘備中守元資、石川左衛門尉久次がいた。

彼らは血気盛りの若武者で、応仁の乱で荒廃していたとはいえ、都の夜を楽しんでいたのである。三人の中では宗親が一番若く、生真面目で備中の領国での小競り合いには常に勝ち抜き領地を次々と拡大し注目されている当節売り出し中の若武者であった。

義稙が海路堺に到着し、堺から陸路入洛した日は六月八日で梅雨の雨がしとしと降っていた。

備中の若武者達も相前後して京都へ入っていたが、その日、元資と久次は予て馴染みの白拍子を求めて賀茂川の川原へ繰り出したのである。宗親は都は初めてであるし、武者詰め所で無聊をかこっていた。

三、三村一族

三村氏の本貫の地は、信濃国洗馬郷（現長野県筑摩郡朝日村付近）であろうと言われている。太平記巻七の「船上山合戦事」に於いて、後醍醐天皇が元弘三年（一三三三）閏二月に、隠岐島を脱出して名和長年を伯耆国に頼り船上山に立て籠もったとき、天皇に加勢しようと馳せ参じた備中の武士達の中に三村の姓が出てくるので、三村氏はおそらく鎌倉時代の承久の乱の後に新補地頭として信濃から備中に派遣されたのではなかろうかと思われる。

石清水八幡宮領の水内北荘（現総社市）の領地を弘石大和守資政の侵略から防いでくれるよう、三村左京亮に依頼した文書が石清水八幡宮に残されているが、その日付は貞治四年（一三六五）となっているのでこの頃から三村氏は高梁川流域に相当の勢力を持っていたことが窺われる。その後、明徳三年（一三九二～四年）にかけて三村信濃守が天竜寺領の成羽荘を侵略しようと策動していたので備中守護の細川氏から荘園侵略をやめるよう圧力をかけられたこともある。その後約一世紀に渡って三村氏の動きは史書からは読み取ことができない。

明応三年（一四九四）に三村宗親が成羽に氏神として八幡宮を勧請した記録（成羽八幡神社旧記）が残されていることからすればこの頃、父祖以来念願の成羽入りを果して、これ以後鶴首城を築いたものと思われる。

三村氏が根拠地とした鶴首城は標高三百三十八メートルの鶴の首のような形状の山上に築かれた山城であり、城の北側に成羽川、西に二つの谷川、南から東にかけては百谷川が流れている。天然の要害であり昔から備後と備中中部を結ぶ要衝の地でもあった。

「お館様は運の強いお方じゃ。こたびの上洛でもきっと、手柄をたてて来られるじゃろう」

と三村五郎兵衛は、主の三村宗親が神前に向かって柏手を打っているのを頼もしげに見やりながら隣に畏まっている郎党の三田権兵衛に話かけた。

「ほんまにそうじゃなぁ。星田の郷よりこの成羽の地へ出てきてから一年も経たないうちに難攻不落の鶴首城を築きんさっただけでもぼっけえことじゃと思ようたのに八幡神社の勧請をなし落慶までなし遂げられたんじゃけぇのう」と権兵衛が感極まった声で応じた。

「八幡神社は弓矢の神様じゃ。せぇがまた三村一族の氏神様でもあるんじゃけぇ余計に有り難いことじゃ。こんどの戦も必勝じゃ」

「年が若いのに信心深いことじゃ」

「そりゃぁ、尼子経久の殿を手本にしようとしておられるからじゃろう。尼子の殿は出雲大社やら日御碕神社に対する崇敬の念が強いお方と聞いているし現実に領地を次々と拡大しておられるけんのう」

「ほんまに、お館様は尼子方に組するおつもりじゃろうか」

「そこが、一番難しいところじゃろう。周防の大内義興殿を頼って都から公家衆がぎょうさん落ちていかりょうるというけん、大内殿についたほうがええんじゃなかろうかとわしゃ思うとるんじゃがなぁ」

「こたびは、都へ将軍様が攻め上られるのにお供をされるのが大内義興殿じゃ。我がお館様は大内殿の傘下で上洛されるということじゃけえ、大内方ということじゃろうが」

「それはそうじゃが、三村の殿へも将軍から直々に檄の文が届けられとるからのう。尼子殿と大内殿と同じ扱いじゃ」

「お館様も面目を施したものじゃのう」

「都へは尼子の殿も上られるじゃろうから、戦振りを見てから決めてもよかろうと思うがのう」

「賢明な殿のことじゃ。そのへんのことはよう考えて決断されるじゃろう」

「こたびの戦勝祈願は八幡神社の落慶も兼ねて執り行われるけんこのあと色々な催しがあるそうじゃのぅ」

「今度は、都でも有名な甫一法師の平家物語の奉納じゃ。滅多に聞けない名調子じゃけぇ

耳の穴をようほじっといてからお聞きんせぇよ」

と五郎兵衛が言った。

「琵琶法師様は何処からこられたんじゃろうかのう。それにしてもお館様に輪をかけてまた若い法師様じゃなぁ」

とさっきから二人のやりとりを聞いていた山形作助が五郎兵衛に聞いた。

「年はまだ十六とかで、童顔じゃが、声は美声で都でも一、二を争ったそうじゃ。こたびはお館様がわざわざ備前の福岡までお迎えに行かれて連れて来られたんじゃ」

「ここには何時までおられるんじゃろうか」

「さぁー」

「また、聞かしてもらえるんじゃろか」

「福岡まで行けば、聞かして貰えるじゃろうとおもいますらぁ」

「戦乱で混乱している都を逃れて周防の山口まで逃げて行こうとされとったんじゃが、何故か福岡が気にいられてそのまま福岡に住みつきんさったということじゃ」

四、洛中その二

宗親は備中青江の名工長谷国平が鍛えた刀を父の時親から元服の時、譲り受け、戦陣には常にこれを佩き幾多の戦功を上げてきていた。この度の遠征でも国平を持ってきていたが、機会があれば京の名工に研いで貰いたいと思っていた。また予備として京土産に良い刀を求めたいとも思っていた。聞けば、戦乱のただなかにある京であっても粟田口に名工吉光の弟子達が細々と刀を鍛えているというので、工房を訪ねてみることにした。

「御免せぇ。刀が欲しいんじゃがひとつ見せてつかぁさらんかのう」

と漸く捜しあてた刀鍛冶の工房へ宗親は入っていった。

「おこしやす」

と手をぼろ布で拭きながら出てきたのは小袖に裳袴をつけた歳の頃十六〜十七でがっしり

した体格だが、肌はぬけるように白い女であった。見ると部屋の隅に火床とふいごが置いてあり、焼きをいれるための細長い水槽もあるが火床には火が入っていない。砥石の側には、研ぎかけらしい刀が一本横たえられている。
「吉光刀匠の在所はこちらでしょうかのぉ」
「へい。吉光刀匠はもうとっくの昔に亡くなりましたが、うちが直系の弟子筋にあたります」
「そうか。それぁぁよかった。刀の良いのを見せてつかぁさらんかのう。都で一番といわれる刀鍛冶の鍛えた刀を買うていきたいんじゃが」
「それが、今は鍛えていまへん」
「どうしてじゃ」
「戦乱で腕の良い鍛冶達は皆西国へ逃げていかはりましたさけ、今はいいものはあらしまへん。情けないことどすえ」
「せぇじゃぁ、刀は全然作りょうらんのかのぅ」
「へぇ。折角おこしやしたのにお気の毒なことどす」
「それは残念じゃのう」
と宗親が落胆するのをみかねて慰めるような口調でその女が言った。
「お侍さんはどちらの国からお越しやしたのどすか」
「備中からじゃ」
「それでは備前の福岡は近こうおすやろ。お国で買わはったほうが良いものが手にはいるのとちがいますやろか。父の弟子達もぎょうさん備前長船へ移っていかはりましたえ」
「そうか。それではどうして、お主も備前へ行かなんだんじゃ」
「父が病気にならはったからどすえ」
「そうか、親御の看病をしょうられるんかのぉ。感心なことじゃのう」
「これも定めですさかいに。父が早う元気にならはることを念じて、励んでいますえ」と明るい声で答えた。

「ところで、あそこに研ぎかけの刀が置いてあるがあれは誰が研ぎんさるんじゃろか」
「うちどす」
「ほう」
「研ぐだけなら女でも出来ます」
「もしや、お主、刀を鍛えたこともあるんじゃろか」
とそのがっしりした体躯をみながら宗親が尋ねた。
「へい。父さまが元気で働いてはった折りには、相槌を勤めたこともおますえ。しかし、父が病気になってからはよう造りません。うちが研ぎ師の真似ごとをして世を凌いでいるのどすえ」
「今は全然作ってないんじゃろか」
「へい。あいすみません」
「父さんが元気だった頃、父さんの作ったものはないじゃろかのう。できあがった物があれば、見せてつかあさらんかのぉ」
「ろくな物はあらしまへん」
と言っていたが宗親があまり熱心に頼むものだから、娘は奥から四〜五振りの刀を運んできた。
「父さまが糊口を凌ぐために泣く泣く作ったこんな物しかあらしまへん。お恥ずかしいことどす」
と娘は刀を宗親の前へ並べた。その中の一振りを取り出し宗親が懐紙を口にくわえ刀身の目効きをしていると娘が言った。
「お武家様、お腰のものをちょっと拝見させて戴くわけにはいきまへんどっしゃろか。うちら話に聞くだけの素晴らしい技物をお持ちのようなので」
「誰の作か判るかのぉ」
と宗親が佩刀を渡すと娘はおしいただいて受取り真剣な眼差しで目効きをしていたが、感極まったような声を出した。

「この刀は長船の名ある鍛冶が鍛えはったんどすやろ」
と言いながら刀に見惚れている顔には清々しいものが感じられた。
「ところが、ちょっと違うんじゃ。備中にも青江に名工がいていい刀をつくるんじゃ」
「何という名前のお方どすか」
「この刀は国平という刀鍛冶が鍛えたものじゃと、父上から聞いていますらぁ」
「ほう。国平どすか」
「そうじゃ。長谷の国平じゃ」
「お武家はん。今の京にはこれほどの刀を造れる刀匠は残念ながらいてしまへん。皆、戦を恐れて西国へ逃げていかはったんどす。悲しゅうおすえ。備前へはこの粟田口からもぎょうさんの名工達が逃げていかはりましたえ備前には福岡の市というのがおますさかいに鋤、鍬を鍛っても食べていけると言うてはりましたえ」
「どうじゃろう。この刀を研いでつかあさらんか」
「へい。有り難うぞんじます。このような名刀を研がして戴くのは幸せなことです。精一杯研がして戴きます。一晩お預かり致しますよって、替わりにこの刀をお持ち帰り下さい」
「それではお願いしますらぁ」
宗親は刀を預けて室町の侍宿舎への帰路を急いだ。道すがら刃先に見惚れている女の清々しい横顔が脳裏にちらついていた。宿舎へ帰りつくと部屋では元資と久次がしきりに議論をしている。
「おう、宗親よいところへ帰ってきた。お主も議論に加われ。それにしても宗親どこへ行っとったんじゃ」
と元資がかわらけを差しだし、瓠から濁り酒を注ぎながら言った。
「粟田口までじゃ」
「なんぞええことでもあったんか」
「刀を研ぎに出してきただけじゃ」

と宗親は平然さを装って言ったつもりだか、先程の女の横顔がちらつき顔が赤くなるのを自分でも感じた。それを見咎めた久次がからかった。
「お主、女と逢ってきたんじゃろ。顔に書いてあるぞ」
「いいじゃあねぇか。宗親も人の子だったということじゃ。せいぜい誑かされぬように気をつけんせぇよ」
と元資がわけしり顔でひきとった。
「そんなんじゃぁねぇ。ただ刀を・・・」
と宗親がむきになって抗弁しようとすると久次が矛先をかわした。
「それよりもさっきの話を続けよう。我等こうして、お館様に具奉して上洛し、都のありさまをみさせてもろうたが、一体世の中はどうなっていくんじゃろか。宗親よお主どう思う」
「権威と実力のある将軍がいなくなったので・・世が乱れているということじゃろうが・・・・強い将軍が出現しなければ、・・・・・世の中ますますひどくなっていくんじゃろうなぁ」
と宗親は注いでもらったかわらけの酒を口へ運びながらポツリポツリ言った。「公家の時代から武士の時代に変わったのじゃ。せぇなのに公家が経済的な基盤もないくせに権威だけをかさにきて失地挽回を図ったのが建武の中興というわけじゃ。わしゃ、そう思うとるがのぉ」
と久次が言った。
「建武中興は時代の流れに逆行した政治ということになるのかのぉ」
と元資が言うと
「そうじゃとも、実力のない者が門閥、位階だけをたよりに威張ってみても誰もそんなもなぁ認めやせんのじゃ」
と宗親も漸く議論の中へはいってきた。
「力の強い者が古いものを壊して新しいものを創りだしていくんじゃろうなぁ」

と久次がうなづきながら言うと
「今は、破壊の時代というわけじゃな」
と元資が言う。
「そうじゃ。だから、国が乱れた」
と久次。
「将軍が弱すぎるのじゃ」
と宗親。
「そうじゃ。時代は完全に武士の時代じゃ。
まさに乱世じゃ」
と元資
「乱世は力の強い者が勝つ時代じゃ」
と宗親
「下剋上の時代じゃ。主殺しでさえ通る時代じゃ」
と久次がエスカレートさせる。
「とは言っても、主殺しは忠の道に反しようが」
宗親は威儀を正しながら言った。
「そねえなことを言ようたら世の中の流れについていけんようになるぞ。時と場合によっては親でも殺す」
と久次
「親を殺す等は人の道に背くことに成ろうがのぉ。畜生になりさがってしまおうが」
と宗親は納得できないという顔付きである。
「例えばの話だ」
と久次。
「何故、武士が天下を統一できないんじゃろかのぉ」
と元資。

「圧倒的に力の強い武士がいないからじゃろうが」
と宗親。
「まてよ。今度は大内義興様が頑張りょんさるからなんとかなるのではないじゃろか」と久次が言うと
「義興様は管領になられて、幕府の重要な地位を占められたので乱世は終わりになるのじゃろか」
と元資も大内義興に期待しているらしい。
「将軍の権威が失墜してしもうたけぇ、命令が守られなくなっているからのう」
と宗親。
「ひょっとして、お館様は将軍にとって替わろうとしていなさるんじゃなかろうか」
と元資は自分の願望を述べる。
「これ、滅多なことを言うんじゃねぇ」
と宗親が唇に指をあてながら元資の顔を見る。
「尼子経久殿と大内義興殿とでは尼子経久殿のほうが実力がありそうに見えるんじゃがなぁ」
と元資が話題を変えた。
「尼子殿はもう年じゃけんのぉ」
と宗親。
「大内殿は雅びに走っしもうて、もののふの心を忘れとんさるけぇ、そう長くはないんじゃなかろうか」
と久次。
「それは言えるのぉ」
と元資。
「安芸の毛利興元殿は大内殿から名前を戴いたそうじゃな。羨ましいことじゃのぅ」
と久次が言った。

「いやいや、我等弱小国人は所詮は大内氏と尼子氏の間にあって要領よく生きていくのに汲々としているだけのことじゃろが」
と久次が言った。戦乱の時代に生きる地方の若武者達の談話はおのずと天下国家に及んでいくのである。都の一夜はこのようにして過ぎた。
翌日の夕刻、宗親が粟田口の刀鍛冶の工房へ研ぎあがった刀を受け取るために、武者詰め所をでかけようとすると荘元資がどこへいくのかと興味ありげに問いかけてきた。
「粟田口まで研ぎに出した刀を受取に行こうとしとるんじゃ」
「ほんまに、刀をとりにいくのかのぉ。誰かいい女性（にょしょう）でもできたのじぁあないのけ」
「そんなんじぁあないけん。嘘と思うならついてきんせい」
「そりゃあ面白い。そしたらついて行こうか、わしも退屈しとるけんのぉ」「そりゃぁ有り難い。途中物騒な森を通り抜けていかにゃあならんけん、ぼっこう助かりますらぁ」
二人は黄昏時を連れだって、粟田口の工房へ向かった。工房近くまできたとき元資が言った。
「俺は外で待っているけんお主、中へ入って用を足してこられぇ」
と心得顔で言った。
「そうか、それではお主ここで待っていてくれ」
と宗親もさからわない。宗親が工房の中へ入ろうとしたとき異様な殺気を感じた。
「この刀は渡すわけにはいかぬ」
と咳こみながら抗う男の声が聞こえた。
「ぐずぐず言わずにこちらへ寄越せ。さもないと娘を明国へ売りとばすぞ」とだみ声が続いた。
「娘に手出しをすると容赦はせぬぞ」
と再び咳こみながら抗う悲鳴に近い男の声が聞こえた。

「押し入りか」
と思いながら刀の鯉口に手をかけたとき、工房の中から刃を打ち合わせる金属音が聞こえた。
「行くぞ。元資あとへ続け」
と叫びながら宗親は工房の中へ飛び込んだ。その一瞬、覆面をした男がふりおろした刀が対峙している男の肩を断ち切り血飛沫が上がった。
「助太刀するぞ」
と叫びながら宗親が抜き打ちに刀を一閃すると覆面の男はのけぞりかえって倒れた。胴に入った一撃で男は絶命してしまった。覆面の男が右手に持っている血糊のついた刀は、まがうかたなく昨日研ぎに預けた国平である。
「どうした。大事ないか」
肩を切られて倒れた男に駆け寄るとその後ろには、昨日の刀研ぎの女がさる轡をはめられて後ろ手に縛られて転がされている。男の体をだきおこすと、喘ぎながら
「お助け下さって有り難うございます。私は刀鍛冶の吉正でございます。長年労咳を患っておりまして、刀を鍛えることもできなくなってしまい、生恥を曝しておりました。娘がお預かりした刀を研ぎ終わり神棚へ奉納したところへ押し込み強盗に入られ、情けない姿をお見せすることになってしまいました。若い頃剣術を学んだことがありますので、無我夢中で立ち向かっていきました。お預かりした刀を賊に奪われてはならないとその一心でした。この病と傷では助かりますまい。どうか娘のことを宜しくお願い致します」
と言った。その間に元資が娘の縄をといたので娘が父親にとりすがった。
「お父さん。死んじゃだめ。」
「奈々よ。兄のもとへ行け」
と喘ぎながら吉正は娘の顔をじっと見つめて言ったが、これが最後の言葉になった。がくりと頭を垂らして息を引き取った。
「お父さん。こんな姿にならはって。あんまりどす。わてもつれていっておくれやす」と

号泣が続いた。
宗親と元資はなす術もなくしばし娘の愁嘆場を見ていた。
やがて、娘は我にかえって人がいるのを思い出し、今度はばったのようにぺこぺこ頭を下げた。
「お許し下さい。大事な刀を盗まれてしまいました。どうかお許し下さい」と哀願するのである。
「刀ならこの通り、取り返した。だが、この刀がお主の父親を殺したとはのぉ。因果なことじゃなぁ」
と宗親も慰める言葉もない。
「お主、身寄りは」
「兄が一人」
「近くにいるのか」
「いいえ」
「遠いところか」
「はい」
「何処にいるのだ」
「備前長船です」
「刀鍛冶か」
「へい昔は」
「それでは、今は」
「琵琶法師どす」
「眼が悪いのか」
「へい、８才のとき父の相槌を打ってはったときに鉄の火の粉が眼にはいりそのまま眼が見えなくならはったんどす」
「そうか。気の毒にのぉ。それで兄者の名はなんという」

「甫一と申します」